

哲學研究

第百十六號

第十卷
第十一冊

精神科學的心理學と青年教育の基礎的研究

小西重直

一

「青年文化」といふ叫び聲は近頃の青年教育の標語であり、また青年運動の一つの旗印である。之れには二つの意味が考へられる。一つは教育上の見地より來るものである。即ち從來青年といふものを人生の過渡期、少年より大人に至る過渡期として考へられて居つた思想に對し、青年期は具體的個人に於ては一生涯一回限の独自の時期であり、他の人生期に見るべからざる獨特の精神生活の領域を占むるものであるから、青年の教育は大人に移る準備ではなくして、夫れ自身に意味を有し、青年教育は青年に適合する教育であらねばならない。青年より大人を作るのではなく、青

年としての意味ある生活を充實せしめ、出来る丈完全な青年に仕上ぐる事が青年教育の本旨であるといふ主張である。第二は文化全體よりの見地からである。即ち凡そ文化といふものは一度建立された記念碑の様に永く固定すべき性質のものではなく、文化は文化其ものゝ中に新しき創造を可能ならしむる所の力を含蓄すべきである。客觀的な文化財が斯様な意味を自己の中に含むて居る場合には永く支持されて行く生命を有することになり、主觀的な文化創造者や文化支持者が斯様な力を自己の中に有する場合には文化の創造發展を起し來たるものである。而かも文化の發展は單に大人のみの作業ではない。吾々は青年の中にも斯様な創造力の素地を認めなければならぬ。此を認めざるものは青年の人格を無視するものであるとの叫びである。此思想が教育的轉回をなす場合には、青年は單に文化受容者ではない。數百年數千年間に大人が作り出した文化財を子供の時代より青年期を通じて僅か十四五年間の中に此を詰め込むことを以て教育の重要事となしつゝある所の現代の教育は青年の文化創造力の芽生を抑壓し、枯死せしむるものであるといふことになる。

吾々は此等の叫が如何程迄正當であるや、教育上如何なる程度方法に於て之れに

顧慮すべきやの一つの重要な研究としては先づ以て青年自身の精神生活を如實に研究して見ねばならない。近來獨逸の思想界に於て青年に關する研究が著しく盛になつて來たのも此等の教育問題と相關聯する所があらうと思はれる。エ、シュテルンやホフマンなどの研究も有益なものであるが、殊にシュブランガーが新人文派のキルヘルム、フンボルトなどの浪漫的な思想の影響を受けつゝ、デイルタイ派の所謂精神科學的心理學の立場に基き、曩きには、生の形式を研究し、今又其青年期の心理に於て此方面の研究に新しき方向を指示せることは青年教育の基礎的研究に於て注目すべきことである。

二

感覺的要素より心を構成せんとする自然科學的心理學に對し、心の關聯作用より出發し、心の合目的の作用をも説明せんとする形態心理學は近頃心理學上の問題となつて居るのであるが、シュブランガーや其派のエ、シュテルンは大體に於て之れと同様の立場より出發して居るけれども形態といふ言葉を避け、構造といふ言葉を用して居る。シュテルンのいふ所によればエルトハイマー其他の所謂形態心理學

者は心をアトム的の機械的要素と見ることに反對して居るけれども、矢張自然科學的の傾向をはなれざるのみならず、或は却て自然科學的ならしめんとする傾向を有して居る。然るにシュプランガーやシュテルンは自然科學的心理學に對し何處迄も精神科學的心理學の樹立を試みようとするのであつて、一般の形態心理學と混同さるゝのを迷惑に考へて居るらしい、従つて彼等は彼等の立場に基く心理學を形態的心理學とはいはずして自然科學的心理學に對して精神科學的心理學又は構造心理學と稱して居る。自然科學的心理學としては感覺などの要素に分解するから此を要素の心理學と稱し、之れに對して「意味」の生活に研究の範圍を求むる所の自分達の心理學を構造心理學ともいつて居る。

人間は或る部分に於ては自然とも關聯し、自然と同様の法則によりても支配さるのであるから、此範圍に於ては自然科學的心理學も相當の意味を有して居るのであるが、併し人間の本質は自然を超越する精神(ガイスト)の生活である。此精神の作用を精神科學的方法に於て研究する心理學が人間の心の研究としての純粹な心理學ともいはれる、

精神(ガイスト)とは人が超個人的な作用關聯に入り込める活動である。價值の方

向に向ふ働である。ガイストの作用とは精神的の組織價值組織を創造するか、又は此を意解する所の心の働である。要は精神(ガイスト)は人間の意識の獨特な働であつて、超個人的の價值を創造し、而かも創造されたる價值をしてガイストをはなれて「妥當」の世界に安住せしむるのである。精神科學は實に此ガイストの客觀化ともいふべき色々の價值體系を意解すべきであり、精神科學的心理學は此等の價值を體驗し創造し又此を意解する所の精神(ガイスト)の作用及精神の客觀的の内面關聯價值法則を研究するのである。自然科學的心理學の如くに、心を機械的要素に分解せずして意味關聯の領域に止まるのである。價值の生活層の上に居るものである。而かも人格は價值體驗と離るべからざるものであり、ガイストなくして考へられないものである。従つて精神科學的心理學の立場は或る意味に於ては人格を價值的に構成する心理の研究である。人格構成の働としての教育に對しては極めて有意義なる基礎的研究とも見ることが出来る。

三

シュランガーは曩に其著「生の形式」に於て精神科學的心理研究の立場に基き、理

論人、審美人、社會人權力人、經濟人、宗教人の六形式に就ては理想的類型として論述し其發展といふ方面には重を置いて居らないのであるが、其近著「青年期の心理」に於ては發展といふ方面にも重を置き精神科學的心理學的研究の立場の下に其研究法として意解の心理構造の心理、發達の心理、類型の心理の四方面に就て考慮して居るのである。

意解の心理。意解といふことは單に同情とか共鳴とかいふものではなく、客觀的妥當的な認識を要求しながら、精神關聯や精神の客觀化の意味を把握することである。外面的な因果關係の説明ではなく、意味關聯の内面に入り込むのである。シユプランガーによれば、價值全體を組織する肢體として價值全體の中に編入されたるものは「意味」を有するものである。換言すれば價值全體に關係し又は價值全體に對して作用しながら價值全體を組織する所の肢體又は肢體の關聯は「有意味」のものであるのである。心の色々の體驗や作業が斯様な状態に於て生命全體に關係する場合に夫等は「有意味」のものとなるのである。吾々の生活は一層大なる全體的な價值關聯の中に肢體として編入さるゝ場合に「有意味」のものとして考へらるゝのである。従つて意解の心理に於ては、人間が意解されねばならぬ所の全體といふものは人間の

個人々々の直接的な體驗世界の全體よりも常に大きなものであらねばならない。此故に青年を意解せんとする場合には青年の現在の直接の生活にのみ捉はれずして、其歴史的社會的の條件狀態等に立ち入り、青年の直接の體驗世界よりも一層包括的に研究を進めねばならない。要は意解は心意の現在の狀態を忠實に寫實するのではない。色々の精神關聯に關し直接の生活意識以上のものに就て研究せねばならない。認識論的に言ふならば、意解の認識的作業は人の直接の體驗内容や又は吾々が推量的に想定した所の他人の體驗内容の經驗的要素を取り扱ふのではなく、夫れは或る意味に於て範疇的形式に依存するのである。即ち吾々は思惟の働によりて精神の生活に於ける「意味」の世界を意解し、夫れによりて心の混亂複雑せる多様な狀態及過程の中に秩序や關聯を見出だすのである。

構造の心理。 既に述べた様に、シュプランガーは價值全體を組織する所の肢體として價值全體に編入さるゝものゝみか意味關聯として認められると論じて居るのであるが、吾々の心の生活は純粹の理念的關聯ではなくして現實在的であり時空の制約の下にあるのである。そして此現實在的のものが意味關聯に關係を有すとするならば、吾々は心夫れ自身を價值實現をなす所の生活體と見做ねばならない。斯

様な生活體を構造と稱するのであると説いて居る。要は構造とは價值實現の作業關聯である。現實在的のものが斯様な構造となるには、夫れは一全體であり、そして此全體に於ては各部分及各部分の機能は全體に對して意味ある作業をなし、又各部分の組織及作業が全體より制約され、唯だ全體のみより意解さるゝ様な目的關聯であらねばならない。従つて構造心理學に於ては心の色々の現象といふものは、夫等は統一的全體に於て如何に價值付けらるゝか、又夫等は全體の作業關聯に對して如何なる意味を有するかといふ點より意解さるべきである。而かも個人々々の心意構造は自然關聯を初め、歴史的社會的の客觀的精神的關聯の廣大な意味構造の中にあるものであるから、個人々々の體驗者は常に彼以上の大なる關聯よりして初めて自分といふものを意解することが出来るのである。

發達の心理。心の發達とは如何なる意味であるか。先づ吾々が心と外界との相互作用によりて經驗する所の變化の系列が考へられねばならない。而かも此場合に於ては方向の規定は主として吾々の内面の素質や傾向の中に存するものである。心の發達に就て考へらるべき第二の事柄は心の開展といふことである。即ち一面には全主觀の統一的な關聯及同自性が確保さるゝと共に、他面には心の機能及作業

の編制が一層多様となるのである。更らに第三の事柄として考ふべきは吾々の努力の目標となる所の價值である。吾々は此價值を實現せんと力め、其爲めに全體の變化を起すことになるのである。要するに心の發達とは心の生活が内面より働き出し、其作業統一體を一層大なる一層内面的なる編制となし、價值生活の向上を進め行くことである。價值生活の向上といふことは生物的な生活能力の昂進に止まらずして、客觀的精神界への参加を至上價值として設定することであらねばならない。斯様な立場に基て構成されて行く心の生活は一面には多様な姿になるけれども、他面には確實に統一され、倫理的内容を有する人格として發展し、精神的な自己構成の力として伸びて行くのである。そして青年の時代は生理的意義の兒童と生理的精神構造と大人の確實な精神構造との中間に介在する精神生活の時期であるのである。而かも青年自身は其心の働を發達現象として直接に經驗するものではない、従つて彼は彼自らを十分に意解することが出来ない。此故に又經驗其ものを單に記載せんとする記載的心理學では青年の發達といふことは分らない。之れは唯だ意解的心理學のみによりて明瞭にさるゝのである。意解的心理學は直接の經驗を記

載するのではなく、一層高い世界に關係する「意味」を研究するのである。併し發達心理學に於ては意解の一般問題以上に進み入り、特殊問題を取り扱はねばならない。即ち、心の若干の現象を發達現象として意解し、此を目的生活に編入することである。而かも青年自らは此目的生活を直接經驗として意識せないのであるから、吾々は此を「意味」の世界として意解するのである。シュプランガーは發達の心理を斯様に説明したる後、最後に類型の心理に就て一言し青年心理研究の態度を一層鮮明に論じて居る。

類型の心理。精神科學的心理學に於ては精神的直觀及精神の客觀化に就て意解せねばならないのであるが、此等は現實在其儘の姿にては數限りもない色々な各個の形に於て表はれ來るのであるから、吾々は此等を若干の類型に還元し、單純化して意解することになる。殊に唯一的特殊な個性を意解するには此方法によるより外はない。類型は全然一般のもの、全然特殊の直觀的のものとの中間にあるのである。丁度理念が直觀に迄移り行く場合の具體化を理想と呼ぶ様なものである。そして類型を得るには二つの途行がある。一は同一の場合の反覆によりて歸納的に得たるもので、之れは平均的類型となるのであり、他は夫々の法則よりアプリオリ

的に構成さるゝもので所謂理想的類型である。而かも歸納と演繹の兩方は相互に相關係し結合する様に此二つの類型研究の仕方は互に密接に結合して居るものである。

吾々は青年を研究する場合に於ても、其心の構造や發達に關し個性的の差別に注意するならば、青年心理學は類型心理學となるのである。そして此類型は一面には心の全體の構造を自分と同方面に向はせる様な有力な素質の原本的な方向によりて起ると共に、他面に於ては客觀的精神によりて設定された生活條件の上に特に注意を拂ふことによりて此類型的差別が起つて來るのである。例へば國民的類型、階級的類型時代の類型といふ様なものである。其他男女の差別の如きも類型的研究に意味あるものであらう。シュプランガーは斯くして其青年心理に於ては國民的類型に關しては先づ獨逸の青年を研究の中心となして居る。そして其時代の類型に關しては啓蒙時代以後獨逸の理想主義的思想と英佛の實證主義的思想を通過して現代に至る迄の凡そ百五十年間に於ける青年生活を類型的のものと見て論じて居る。最近の世界戰爭當時の獨逸青年や其後の革命時代の獨逸青年といふ様な細かな類型的差別迄には深入りして居らない。又男女に就ては主としては男子

の青年に重を置いて研究して居るのである。そして相當の教育ある彼の所謂市民的青年を中心として居る。無産階級の青年と市民的青年との差は田舎と都市の青年程には大ならずと考へて居る。

蓋し青年は一面には自然的環境に於ける自然的のものとも見られるであらう。従つて青年には其住する地方の氣候や山河の姿等により影響さるゝとか、又は其屬する人種や種族などの特性を有すといふことも言はれよう。併し青年の精神發達に對しては單に自然的環境のみではなく、客觀的精神が大なる力を發揮してゐる。客觀的精神は歴史の社會的實在の一部であつて自然の土臺の上に開展するものはあるが、而かも容觀的精神に於ては一般的な構造法則がある。一般的な意味法則や、方向を指示する所の規範も含まれて居るのである。そして此一般的な框の中に夫々具體的の歴史的文化は其特殊な特質を發揮するのである。従つて青年の心の發達は單に精神一般のみによるものではなく、或る一定の精神、或る一定の文化及文化社會によるものである。或る一定の國民生活や、精神の或る一定の歴史的时代によるものである。シュブランガーは斯かる態度に基き青年心理に於ては空なる一般心理を企圖せずして、獨逸の一定の時代の青年の心の類型を研究したのである。

而かも青年の一般心理は色々の國民や時代に亘り青年の比較研究をなすにあらざれば成立困難のものどさへ考へて居るのである。

元來意識は全體性的のものであつて、個性的類型の表はるゝのは色々の價值への努力の程度によりて決定さるゝのである。宗教人と雖も經濟や理論や其他の價值生活に全く沒交渉全く無關係といふ譯ではない。唯だ此等に對しては濃厚に關心せないか、又は此等を宗教的立場より眺むるのである。従つて個性は孤立的な寂寥の生活ではなく、意識の全體といふ地盤の上に立ちながら、主として特に或る一方面に向つて進展せんとする努力の連續である。シュプランガーは「生の形式」の研究に於て試みた様に青年の心理に於ても數種の價值への努力に就て研究して居るのであるが、意識の全體性といふことは常に考の根底に含まれて居るのである。殊に青年時代に於ては成人と異り、價值への努力より生ずる個性は未だ一定の狭き範圍の姿で表はれて居るものではなく、廣き全體としての色彩が濃厚であるからして、青年心理に於ては彼が「生の形式」に於て理想型として研究せる六種の個性が最近百五十年間の期間單位に於ける獨逸の青年生活に於て如何なる姿に於て表はれ、如何なる類型に形成さるゝかといふことを見ようとして居るといつてもよい。

彼の青年心理研究の特色として最後に特に見逃すべからざる重要な點があるのである。彼は從來の青年心理の研究は多くは身體的方面の變化に基て心意方面の變化を説明せんとして居ると難じ、殊に性の問題等に就てはフロエド一派の様な廣義な性慾中心の研究に對しては反對の立場に立ち、性に關する體驗と愛に關する體驗とを區別し、精神の研究である所の心理は純粹に精神其ものに基きて心の働を研究すべきであると高調して居る所は注意すべき點である。勿論彼は心身の密接なる關係を認めて居るのであるが、心の働は單に生理的變化より直ちに伴生的に起るものではない、青年の心の働は性慾によりて影響さるゝもの以外に尙ほ意味あるものを含み居るものである。子供の時代に於ても性的好奇心が表はるゝのであるが、同時に此を阻止せんとする傾向や、此れに對して恥を感ずる様な精神もあるので、心の發達變化は決して性中心主義の立場のみで説明し得るものではないといつて居る。

要するにシュブランガーは精神科學的心理學の立場の下に、意解の心理構造の心理、發達心理、類型心理の關聯的各方面の見地に基き、青年心理研究に新天地を開き、青年の總體的特性、其想像生活、戀愛や性の心理、其社會生活、道德的發達、法の意識や政治

生活、職業上の問題、青年の知識と世界觀の問題、其宗教生活の發達、生活感情の類型等の重要なる問題に亘りて新しき見方で研究を進め居り、青年教育の上に新しき基礎的研究を提供して居るのである。